

——語り伝えること——

(一) 寺祿を辭退して檀家を願ふ

藩主二十九代重信公時代と聞く、當時の風潮として各宗諸山寺祿を食み寺格の高下を争はんとする時代、當山に對しても寺祿を下賜すべき内達を受けたる所、時の住持深く考ふるところあり、且寺祿に晏如たるを、屑しとせず、寧將來の爲檀家を増し護法百年の計を樹つるに如かずとなし、強て寺祿を辭退し其旨藩に申出でたるに藩廳之を容れ寺祿に相當する侍士壹百軒を新たに附檀せしめられたり、住持上人の心事高明とその先見の明轉た敬仰に堪へざるところなり、今日當山の檀家に名門多く現に重要な地位にある名士の多きは獨り當山の永久に誇とする所なり。

右は從來確かなる事實として口碑に傳はる所にして、第一章に記すべき事項に屬し不肖銳意之が文獻を求めたるも未だ發見に至らず、その住持上人も寛文三年當山移轉直後か或は貞了院殿葬送前後の年代と思はれ則第五世日生上人か。若くは第六世日普上人時代ならんも是亦判定するの資料無きを憾とす、一面却つて其上人の判明せざるこそ寧懷しく又尊く思はるゝに依り暫く紋上の梗概を記し他日の涉獵研鑽に待つことゝせり之を諒せよ。

(二) 日明上人の剛勇

第十四世日廣上人代客殿の修築を爲すに當り境内山上の巨松を伐採しその用材に充たり檀信徒十餘人か運搬に奉仕せり弟子日明上人亦之に加はり坂路擔出中前方の數人躓き仆れその跳にも一齊に仆れ危く其下敷とならんとせり上人後部にありこの時滿身の金剛力を發揮し獨力能く之を支へ辛ふして危難を免れしめたり上人この時肩胛と脚部を傷け終身跛足となりしと云ふ、世呼んで跛行上人と稱せ

晏如^{あじ}||安んじておちつくさ

屑^{いさまし}||屑しとせず心よしと

ま。
しない。

りと、庫裏梁間の巨木今に儼として當時日明上人の剛勇物語を傳へ居れり。

(二) 檀信徒の諸團體

第十八世日誠上人代天保、嘉永の頃までは題目講、和讚講、女人講等と稱する團體ありしが安政の頃に至り漸次發展して大乘講、一乘講、大乘女人講等と改稱し活躍せり、明治三十年頃に至り諸團體統一の機運を促し大同團結して顯本講、顯本女人講と改稱したり、是より先宗學研究の會起り碩學原勝外先生指導の下に古川平七 吉田榮吉 宮田元治等の諸氏熱心唱導せり、次て青年層の擡頭と爲り明治三十一年中村謙藏 島川常麿 阿部秀三等主唱して顯正會を創立し成島泰行 秋葉顯正師等の來援を得て大に氣勢を揚げ或は日曜學校を開設して青少年の訓育に従事する等開宗六百五十年記念の前後に於てその運動甚だ見るべきものありき。

大正に入り富田小一郎氏等地明會を起し大正十一年に至り富田小一郎 中村謙藏 關壯二等發企の下に日蓮主義研究會を創立次て昭和六年七月に至り南部日實、小林茂雄 中村謙藏 谷山正國主唱の下に立正會を組織して立正主義を強調し又立正婦人會、立正青年會等起り時代應化の躍進を見以て今日に到れり。

(四) 庭 園

當山庭園は本堂西側と客殿北面とに位置し後方丘陵斜地とを併せ造られ其規模大ならざるも古來名園として名あり、その樹木泉石の布置桃山時代の築庭法に則り且種類の異りたる躑躅の老木多く斯道の名家に鑑賞せらる、曾て丘上に蝦夷松の巨木あり長幹亭々この地方稀に見る珍種に屬し、寛政年間南部利敬公幕命に依り北海警備出陣の際出動したる檀家の一人彼地より稚樹を持來り植付たるものにし